



トンチャイ・ウィニッチャクン 『地図がつくったタイー 国民国家誕生の歴史』

日向伸介

「国民」という観念は、国境線で区切られた領域＝国家の存在を前提としている。その領域を分かりやすく示したのが地図である。我々はそれを客観的・中立的なものとして当たり前のように受け入れ、時にはその姿を遠い過去に投影することもある。しかし本書が19世紀後半～20世紀初頭のバンコク王朝とイギリス・フランス両国の国境画定作業を事例として描き出したように、地図そのものと地図を土台とする国民国家の物語は、紛れもなく近代の政治的な構築物であった。そして、西欧由来の領域概念と近代地理学を取り込みながら、半ば独立していた地方権力に支配を広げたバンコク王朝は、実は植民地主義者に比肩される存在であったことを本書は示唆している。このような視点は、植民地化の脅威から独立を守った国民的英雄としてバンコク王朝の国王を称揚する従来のタイ史観とは全く異なるものであった。反軍政を掲げる1970年代の学生運動で指導的役割を果たし、ついには保守派の暴力によって多くの同志を失い傷つけられた著者の怒りが感じられる。国民国家論とタイ史研究の両分野で画期をなした刺激的な文献である。



出典:

- トンチャイ・ウィニッチャクン 『地図がつくったタイー国民国家誕生の歴史』
(邦訳：石井米雄、明石書店〈明石ライブラリー〉、2003年)
- Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*
(Honolulu: University of Hawaii Press, 1994)